

# 大学生活における学生と教師について

山 本 昌 木

---

Masaki YAMAMOTO

On the Students and Teachers  
in the University Life

---

## I はじめに

この小文は、人文科学や社会科学の論文ではない。学生と教師との共同体である大学という場において生きることについて、教育学や倫理学にしろうとの私のささやかな随想文である。

もう10年近い昔の話であるが、私が学生部長の頃、原水爆反対のため学生自治会が授業放棄を決議した。私は自治会幹部を自宅に呼び、平和を愛する気持はよくわかるが、学問をするために大学の門をくぐった者が、自分自身を棄て去る行動はよくないと深更まで話し合った。その後、学生部長任期満了後であったが、安保闘争が全国的規模で行なわれた。学生と教官との話し合いが持たれたとき、授業放棄を叫ぶ学生達に „Sei getreu bis in den Tod, so will ich dir die Krone des Lebens geben” という言葉を引いて学徒として自殺行為にも等しい授業放棄という手段を取らなくても諸君の平和を愛する気持は表明できるのでないかと発言したが、日ならずして自治会のボックスに反動教官一覧表が貼り出され、その中に私の名前も含まれていた。安保闘争はすさまじいものであった。学生達の止むに止まれぬ愛国心の発露だったのであろう。学徒出陣にも似た悲壮感の漂うものであった。

二十何年前、私共は学徒出陣の美名のもとに、学園をあとにして兵營へと急いだ。国家危急存亡の秋、剣のみが必要で、もはやペンは必要ないという師団司令部参謀の言葉にいきどおりを感じながらも、「国破れて山河ありというが、国破れて山河はない。国と共に生き、国と共に死のう」というのが当時の学生達を少なくとも表面的には支配していた考え方であろう。私はふと東条さんに号令をかけられた戦時中の日本を思い出した。私は学生達が自分自身で物を考え行動しているのだろうかと心配にな

った。それ以来、折にふれては、大学、学生、真理、平和などの問題につき考えてみた。しかし、これら一連のことがらはあまりにも基本的であり、あまりにも広汎であり、人文科学者や社会科学者が長年考えつづけて結論の出ない問題に、植物病理学という自然科学の一分科を専攻するものが取り組むこと自体無理であった。また最近、ある宗教団体に属する学生達がやって来て因果律は科学の世界でも宗教の世界でも成立すると論断した。こうなると自然科学を学ぶ者として科学と宗教との関連性についても考えざるを得なくなった。私は、本学の元非常勤講師逸見武雄博士が御臨終の病床で学生の夢を見るとおっしゃったのを思い出す。このように死ぬまで学生を愛しつづけることができるだろうかと思うと冷汗が流れて来るのである。

創立当時からお世話になった本学も国立移管のために、いよいよ近いうちに幕を閉じることになる。以上のような理由で、大学に職を奉ずる資格は無いけれども素朴な思索の跡を残して置くのも記念になるかも知れないと思い筆を執ったしだいである。

## II 学 園

ヤスパース<sup>(17)</sup>は「大学の課題は研究者と学生との共同体のなかで、真理を探究することである。大学は一つの自治組織体である。大学という組織体は自己を自主的に自覚せねばならぬ」という。大学の自由は本質的には学問研究の自由を意味する。学校教育法第52条に大学の使命は基本的には学問の研究と教育にあるとうたっているが、学問が健全な発展をするためには、外部からの圧力や干渉を受けてはならないし、またこの大学の自治が守られるためには大学自体その運営面で充分その責任を果さなければならない。大学が与え得るものは単なる断片的知識でなく、研究の態度と方法である。大学における教育は流動しつつある学問を **dynamic** な形で学生に示し、学生は自分でそれを体当たりして受けとめて行くところに価値がある。単に既成の知識や学説を受け売りするのでは学生はついて来ないであろう。学生もどのような筋道でその結論が導かれたかについて教官と一緒に考えて行くことが必要である。大学教授は絶対間違いのない真理のみを学生に教えるだけでなくまだ確定的でない事実をも学生の前に投げ出し、学生と一緒に考えて行く態度が必要なのでなかろうか。一緒に泥まみれになって精進して行くところに大学の価値があると思われる。

学生の側からの大学教師像も学問研究者であると共に教育者であってほしいが、学問研究なしの教師タイプは論外であり、教師自身が研究に励まずしてどうして学生を教育できようか(岡田勝子 日本女子大文学部学生)<sup>(145)</sup>となかなかきびしい。このように学生もひな壇の大学教授よりも泥まみれになって一緒に真理の探究を試みようとする教師により親近感と安心感を持つであろう。魅力的な教師は学生集団に飛び込み、そのよき相談者となる必要があろう。学生自身、わずか4年間で積極的に学問に立ち向って行く態度を身につけるのはむづかしいかも知れないが、そのような雰囲気育てられてこそ初めて将来高い職業的地位についた場合、すぐれた市民として立派に身を処するたくましさや謙虚さが培われるものと思うのである。

大学における教師と学生との関係は、あくまでも真理探究を目的として成立するものであり、問うこ

となしに学ぶことはできない。目の前に横たわる事柄の原理や理由を探らねばならない。

このような学問真理の探究が自由の雰囲気で行なわれるためには、外部からの勢力に左右されてはならない。もちろん大学も時代と共に歩むものであり、社会の要望を無視することはできない。しかし、真に社会が大学に要求するものは、近視眼的に社会の要求に即応するものでなく、<sup>(I 50)</sup> 長期的な視野に立ち、人類の永遠の福祉を見通したいわば「歴史の要求」(国大協：大学の自治の本質)でなければならない。

ここで大学の歴史をふりかえってみよう。<sup>(I 1,6,10)</sup> 大学らしいものは、紀元前385年プラトンがアテナイの郊外アカデミアに学校を建て、祖国の危機を救うためにすぐれた教養を青年達に与えようとした。中世のユニベルシタは学徒が共同の目的のため自治生活を始めたもので、ボローニヤなどはその例である。中世大学の中心は神学であり、人間の本質の魂の育成を主とし、身体の秩序、社会の秩序を取り扱う医学、法学が実践的学問の代表と考えられた。日本の大学に大きい影響を与えたのはドイツの大学である(1694年ハレ大学、1737年ゲッティングゲン大学、1809年ベルリン大学がそれぞれ創設された)。ベルリン大学は従来の神学の代りに人文主義的となり、哲学が中心となった。フンボルトは大学においては単なる博識が求められるべきでなく、探究の精神が尊重されるべきであり、学問と研究の自由が尊重されねばならないとした。学問の自由(Akademische Freiheit)<sup>(I 1,3,12,15,16)</sup>は外部からの妨げを排除し、内部からほとぼしる力で真理を探究することが強調されねばならない。<sup>(I 49)</sup> アメリカの大学は社会の要求に答える大学であり、真理のための研究というよりもその応用を目的とする研究、さらにその企業化、管理化を目的とする研究に関心が示されている。大学民主化の理念は、プラグマティズムの思想に支えられ、実用主義的な大学理念が生まれた。

日本の大学はドイツの大学理念に基づいて成立したが初めから国家の施設として成立し、戦時中は直接大学は国家に奉仕すべきものと考えられ、終戦後は新制大学となり一般教育の重視、専門的職業的訓練が重視されている。

ここでもう一度大学の自治、大学の使命、責任などにふれてみたい。前述のように大学は時代の流れの中に「歴史の要求」に対処することは必要であろう。

大学の自治は、憲法で保障された学問の自由を主とするものであるが、大学で学ぶ学生にも学問の自由があり、学生の自主性も保障されるのは当然である。しかし、自治を伴う共同体としての大学と学生の自治とは必ずしも同一でない。<sup>(I 57)</sup> 国大協の「学生問題所見案」に、「学生自治は学生の先験的権利でなく、<sup>(I 46)</sup> 大学という研究、教育に本来的に欠かせない秩序を前提として初めて肯定し得るものである。この秩序を顧慮することなく学生が無制限に自治を主張するのは大学の本質を理解しないものである。<sup>(I 15-17, 52, 57)</sup> 大学の本来の秩序とは学問の研究に教育などが自主的、自律的に発展深化させることを保障する秩序であり、その秩序がいかにあるべきかを究極的に決定する責任は教授会を中心とする大学組織とその長にある」と述べている。

学生の自治は学生生活における自主自律性の涵養、学生間の切磋琢磨、社交性の陶冶などに寄与するために課外活動として自治を許すべきであると考えられる。大学の秩序は大学自身において維持すべきものである。行き過ぎた学生運動は大学の責任において秩序を維持するのが困難となる。学生が完全自

治を主張するあまり、大学の規則や慣行を無視するのは学生自治の本分といえないと思う。

学生生活活動の中心をなす学生活動は学園内での自律活動とその責任を負うわけであり、全学生の積極的参加により、全学生の総意により民主的に運営されるべきものであるが、少数の活動家に支配されたり、学内の学生の総意というよりも外部からの思想の受け売りだけで動くのではないと思う。ほんとうに自治会を愛し、大学内における学生の自活を自分達で打ち立てて行くためには自分達の大学を愛する学生自身の自覚と民主的にこれを運営するルールの確立、たとえば、委員の選挙の際の立候補や投票の方法、財政的管理面に留意することが必要であろう。大学施設については大学に管理者としての責任があり、その範囲内で学生に自主的に運営を委ねるべきものであろう。学生運動は一般的に学生のヒューマンティーのあらわれと見られ、弱いものの立場に立ち、不正不義を憎む青年らしい純粋な隣人愛より出発することが多いけれども、理論的というよりもむしろ感情的である。<sup>(138)</sup>

日本の学生運動の実態はつかみにくい。固定したアイディアというよりも、どんな問題にでも敏感に反応する青年らしい純真さから発生することが多く、若さのエネルギーを一種独特の英雄的感情のもとに過度の自治活動やいわゆる太陽族行動で発散させることも多い。よく現代の学生には骨がない。思想がないといわれる。安田氏は「現代の学生はダメである。現代学生には知的渴望がない。知的好奇心も持っていない。」ときめつけて居られる。私には、かならずしもそういう切れないと思うのだけれども……。

現代の学生の「非学生化」現象としての知的好奇心の欠如は世界観の喪失からくる ἀπάθεια (アパテイア) すなわち πάθος (パトス—情熱) の喪失である。

学生運動の歴史は共産党およびその親衛派と学生独自の運動グループとの対立や反撥の歴史ともいえよう。マルキシズムは労働者階級の解放理論として強い魅力を感じるのであろう。学生運動の問題点としては、学生団体内部の分裂、たたかう目標の相違、戦略戦術の相違、外部の政治、社会の影響などが考えられよう。また活動家の独走性、活動家の前衛意識と一般学生の意識のズレも考えられよう。また自由のはき違え、自我の欲求貫徹のための自己主張が集団的であることも多い。いずれにしても学園内の学生全員の総意により自治会が民主的に運営されるならば、学生の正常な希望は大学側としても正しく受けとめ、実現できるよう取り計らうべきである。そして学生も教官も誠実に話し合い自分達の学問の共同体である自分達の大学を外部からの圧力に対し自分達で守って行かねばならない。このような見解は、昨年11月東大が発表した「大学の自治と学生生活」も今回の国大協の学生問題に対する所見案も<sup>(146)</sup>ほぼ同じ考えのように見受けられるが、妥当な結論であると思う。

大学では人間形成の場がなく、高校からの進学と就職とが直結し、社会もすぐ役立つ学生を求める傾向がある。しかし知性のためにこそ大学が存在するという大前提はどんな事態が起ころうとも崩されてはならない。<sup>(142, 3, 5, 12)</sup> もちろん、学生を生長しつつある全人 (Whole man) として広い立場から温かく見守るべきで、単に知識のみを求める立場をおしつけるべきでない。けれども、大学の伝統的責務である知識の開拓も人生の根本問題を考えようとする訓練も早くいいところへ就職したいという欲求には敗退するのではないか。地道に卒業論文に取り組むよりも就職試験に合格する方がより重要と考える学生はいないだろうか。最近の学生は学校でも背広を着用することが多い。外国から帰ると日本の学生のツメエリは変

なものに目に映るけれども戦前の学生は学生服に特権的なエリートの自覚があった。最近の学生は自分をサラリーマンの卵と考えているのだろうか。

大学は学問の蘊奥を究めるために存在する。学問を学問たらしめるものは学問的実存である。存在論的決断 (Ontologische Entscheidung) が必要である。「何が」のみでなく「誰が」が重要なのである。歴史の責任に決断的に応答する愛の実存がなければならない。社会科学も科学である限りあくまで実証主義的であり、客観的立場を取り、人間の主観を除かねばならない。しかしこれは第三者的な立場であり、社会現象も主体的に認識するものでなければならない。自然科学では主体性をゼロにコンバージョンすべきであり、逆説的にはゼロに無限に近づくと見えよう。しかし、主体性排除を無限に努力しても主体性は完全にゼロにならない。ここが大切である。現実を主観と客観とに分離すること自体無理かも知れない。

現在大学教育が普遍化し、日本では戦前の中学生よりも大学生の方が率が高いという。驚くべき進歩であり多くの人が大学教育を受けられることは日本の将来の発展のための基礎としてうれしいことである。しかし、マスプロ化し、研究の意欲もない学生の集まりが大学にあればゆゆしい問題である。

一方、大学教師側にも問題があり、大学教師の任務として研究、教育、管理の三つがあり、その三つの能力のうち一つを欠いても大学教授としては充分といえないであろう。<sup>(I 47)</sup>ところが管理はもちろん、教育をすら雑用と考え、研究に専心したいという気持を持ちながら、そのようにできない制約に悩んでいるのが大学教師の現状であるまいか。ここにも学生との十分な接触を持ち得ない一面があるように思われる。

新制大学では、一般教養が重視せられる。<sup>(I 5, 23)</sup>学問する以外まず人間らしい人間となることが要求されているのであろう。しかし、人文、社会、自然科学等計36単位以上の履修が必要であるといってもそれぞれの学科で入門的知識が教授されるだけで学生の思想や生き方がどの程度問題とされているのだろうか。最近中教審から「期待される人間像」が出された（この人間像に対し反科学的だという批判すら公表されているが）<sup>(I 43)</sup>が、思想不在の教育の中から人間像が成立し得るだろうか。大学出身者が国家公務員上級職受験の際専門はよくできるが、一般教養の点数が低いという試験官の批評である。○×だけで一般教養がテストできるものとは思えないが、広い視野をもつ人間が要求されるのは当然である。考えるプロセスを省略したり、附和雷同する傾向など、学生達の質的低下は大学入学以前の人間不在の教育に問題があろう。短い人生の大切なステージの学生時代に、人間はどのように生きるべきかを真剣に考えて頂きたいのである。女子学生にとり大学はボーイハントの場であり、嫁入り道具の一つであり、男子学生にとり大学はガールハントの場であり、就職準備校に過ぎないとすれば悲しいのである。今すぐ実用的に役立つ人間を社会が要求する現状では、一般教養というと何かあいまいで専門の下積にしか過ぎないように思えるかも知れないが、一般教養の裾野を持たない人間は片輪であるといわれても仕方がないであろう。

大学は「歴史の責任」に決断的に応答する愛の実存がなければならない。といっても歴史をどのよう<sup>(III 63, 64, 69, 72, 87-94)</sup>に見るかは大問題で唯物史観にもとづくものもあろうし、トインビーのような見方もあろう。自分の世界観、宇宙観を打ち立てるのは容易なことでない。何となれば、私共の身のまわりには、政治、経済、社<sup>(III 33)</sup>

会、その他いろいろのことがらが多次元的に入り組んで、あまりにも複雑であるからである。反デューリング論は哲学、社会主義の全領域にわたるマルクス主義の世界観を包括的に述べた資本論と並ぶ古典ともいえよう。レーニン(III 11)の「哲学ノート」を読むと彼の思想形成のプロセスがよくわかる。そして彼の徹底した勉強ぶりに感心させられる。こんなことをいうと共産主義者に叱られるだろうが、第13章の弁証法、否定の否定のあたりを読むと、何となく般若心経(III 19)の「色即是空、空即是色」を思い起こさせる。もし大胆ない方が許されるならば、マルキシズムは一つの偉大なる宗教なのだろうと思う。理想を単なる夢で終らせるのではなく、ヴィジョンを彼岸においてでなく此岸に作り出そうとマルキストは努力しているに違いない。マルキシズムに関する文献は尨大であり、まだ充分に読みこなし得ないので批判することはできないが、私自身きちんと組み立てられた唯物史観よりも、あるいは八方破れのように見えるかも知れないトインビー(III 33)の歴史観に共感をおぼえる。大学において研究の専門化は必然であるが、学問が専門化し技術化すればする程人間が機械化され、マックス・ウェーバー(III 62)のいう *Fachmensch ohne Geist* (精神なき専門人) ができて来る。人間が物となり全人的人格形成の教育がうすくなる。社会というマクロの世界でミクロの個人の人生をどのように生きるかについてはつぎの章でもう少し触れてみたい。

### III 科学・宗教・生きること

人間が広く自然界を観察し、いろいろの経験から得た知識を秩序づけて整理し体系化したものが科学である。科学それ自体には方向がないかも知れないが、科学は社会に應用して初めて価値判断の対象となり文明の利器ともなる。科学に固定した目的はない。科学には人間の価値判断は含まれないけれども、科学の主体性は人間にある。ともすれば暴走しがちで、時には悪魔の学といわれる科学を正しく価値づけ、判断し制御するのは人間である。科学は人間の生活に仕えるものであり、人生を豊かにするものである。それ故にこそ人を愛する使命感に生きる科学者が貴重なのであるまいか。科学者は正しい人間性——正しい社会のために人間の幸福のために自分を捧げる精神が必要であり、金と名誉とに縁がなくなれば研究を止めるのであれば真の科学者といえないであろう。

自然科学でも社会科学でも科学である限り限界があり、この限界を知るものこそ科学するものの立場であるまいか。早坂博士(IV 8)は「科学は創造への探求である」といわれる。前述のように、科学における主体性は人類であり、科学を生み出すものは人間である。科学的成果には、人間の愛と熱情とがある。真理に対する畏敬の念がこの愛と熱情とを駆り立てるのである。

科学の真理は、その非完結性にある。これをはっきり認識するもののみが真理に対し開いた態度を取り得るので科学を絶対化する危険から免れることができる。

ある現象が起こる場合、四つのWが必要であるといわれる。When, Where, Who, What である。自然科学の場合、再現性が必要で、いつどこで誰が何をしようとも同じ結論が出なければならない。ところが信仰の世界では繰り返しや置き換えが不可能である。ほかの人で代用するわけにはゆかない。私共は一回限り生まれ、一回限り死ぬのである。そのように私共の人生は大切なのである。それ故実存的

決断が必要となって来るわけである。信仰的知識と科学的知識とは異なっている。科学のメスは人格的対象には無力である。知るという意味が違うのである。「子を知るものは父のほかにはない」と「種は芽を出して育つがどうしてそうなるか人は知らない」という二つのものを比較してみると、前者は人格的知識であり、後者は科学的知識であるといえよう。<sup>(IV 18)</sup> 人格的知識は対象により限定される。科学的知識は知覚と経験とによるものといえよう。このように科学の世界と信仰の世界とは別々のものであり、遺伝や進化などの因果律が信仰の世界でもあてはまると考えるのは間違いである。トインビーも科学と宗教とではそれぞれ別の種類の真理を追究するものと考えている。

私共が自然現象を研究し、その神秘的な美しさに驚くことが屢々である。しかし、科学的自然がそのまま神の栄光ではない。自然を超えた聖なる超越者である。神をみたものはまだ一人もいない。神はかくされている。<sup>(II 88)</sup> ヤコービも知られ得る神はもはや神でないとして述べている。それでは神は一体どのようなものであろうか。

本居宣長の古事記伝第3巻には日本の神に対する考え方がはっきり出ている。すなわち「迦微とは古<sup>カミ</sup>御<sup>イニシエ</sup>典<sup>ミ</sup>どもに見えたる天地<sup>アメツチ</sup>の諸<sup>モロモロ</sup>の神<sup>カミ</sup>たちを始め、其を祭れる社<sup>ヤシロ</sup>に坐す御<sup>ミ</sup>霊<sup>マタ</sup>をも申し、又人はさらにもいわず、鳥獸<sup>ヨノツネ</sup>木草<sup>コト</sup>のたぐい、海山<sup>カミ</sup>など其のほか何にまれ尋常<sup>ヨソ</sup>ならずすぐれたる徳<sup>トク</sup>ありてかしこきものを迦微<sup>カミ</sup>とはいうなり」と書いてある。このように日本の神道ではいわゆる八百万の神というように自然の造化<sup>ヤオヨロズ</sup>の中に神を感じ取って来た。<sup>(IV 54, 55, 105-108)</sup> 稲作の農神のように民族信仰は一般に素朴であり雑然とした感じを与える。宍道湖の静かな眺めにも自然の美しさを感じるし、細胞の微細構造にも生命の神秘を感じる。しかし、自然の造化で神の証明をしてはならない。何となれば、かえって宗教の信用を落とすことにもなりかねない。自然の神は恩寵の神でない。

私共が注意しなければならないのは、自然科学で説明できないところに神があると考えるのはきわめて危険である。顕微鏡下にみる細胞内の原形質流動に神秘的生命の躍動を感ずる。けれども、これすなわち神なのでなくて、神谷教授により現象論的には動力学的に明快な説明がなされつつある。力学や万有引力で説明できないニュートンの才差運動も一世紀後ラプラスにより説明されてしまった。このように科学は絶え間ない進歩をなしつつある。もしある時点において科学で説明できないところに神があるとすれば、神の性格は刻々に変貌するであろう。自然宗教(Natural religion)は結局は宗教そのものの否定である。<sup>(IV 82)</sup> つぎに問題となるのは、信仰と科学とまったく別の世界であると割り切ってしまう態度である。神が先立ち人間が従うのである。神についての信仰でなく神においての信仰でなければならないと思う。このような立場に立って物を考えると、原子力の平和利用、動植物病原菌や殺草剤の軍事利用の使用禁止など科学者として取るべき態度はおのずから明らかとなって来るであろう。

宗教的なものと信仰とは違う。世の中には沢山の宗教があるが、これらを比較研究して信仰が生れるのではない。<sup>(IV 62, 69, 70)</sup> 比較宗教学はあっても比較信仰学はないと思う。ムード的な宗教性(Religiosität)と信仰(Glaube)とは違うのである。一つのはっきりした信仰の立場に立てば、他の宗教についてもその特徴をよく理解し、寛容と尊敬の念を払うことができるであろう。<sup>(IV 20)</sup>

真の宗教は科学的合理的主義を含みながらも、それよりも大きく、道徳を含みながらもそれよりも高いものである。信ずるものに取っては信仰は唯一であり絶対的である。相対的人間が絶対者と出会うこ

とは、ちょうど太陽のエネルギーに焼かれてしまうような関係であろう。

私共の人生は長いようでも短いものである。戦争中は大君のしこのみたてとして生き、そして死ぬことが日本人の本懐とされた。<sup>(VI 54)</sup>死に直面すれば人生を深く考えるに相違ない。<sup>(VI 51,55,56)</sup>Leon de Montenaeken の *Peu de chose et presque trop* の詩につぎのようなものがある。

La vie est vaine	人生はむなしく
Un peu d'amour	少し愛があり
Un peu de haine	少しにくしみがある
Et puis—bon jour.	それでは今日は!
La vie est brève	人生は短く
Un peu d'espoir	少し希望があり
Un peu de rêve	少し夢がある
Et puis—bon soir.	それではおやすみなさい!

この人生の過ごし方味わい方は人によりいろいろ違いがあろう。ほろにがくよめきの人生とみる人もあろう。夢多きバラ色の人生とみる人もあろう。生は悩みなり (*Leben ist Leiden*)と、悩みのあまり自殺する人もすくなくない。いずれにしても私共の生活の基本をなしている生命の問題を深く考えることは必要であらう。また私共農学に関係するものには、<sup>(VI 3)</sup>医学者と同様生命の問題はきわめて大切である。この問題を掘り下げる場合、二つの見方がある。一つは生命の現象面であり、他は生命の本質についてである。

現象を取り扱うのは科学である。生命の躍動する姿を物理、化学的にとらえようとするのである。私共の身体は器官よりなり、さらに多くの細胞より構成されている。生命現象は原形質で営まれる。形態学的に生命現象を、組織や細胞の変化としてとらえようとする試みがなされ、さらに、X線回折、位相差、偏光、電子顕微鏡など一連の新しい手段の登場によって、細胞内の細かな構造の変化がうかがえるようになった。今一つの面は生命を物質としてとらえようとする試みもなされる。生物の遺伝現象を支配する遺伝子(ゲン)は染色体中に存在し、DNA(デオキシリボ核酸)と関係があるといわれる。生体内では物質の合成と分解とが盛んに行なわれ、正常な生きている状態ではこれらがつつもバランスの取れた動きをしている。

生と死とを明確に区別するのは困難である。哺乳動物の場合、心臓の動きが止まった時を以て死と称するが、それでも手足の細胞はまだ生きている。組織細胞が死ぬと呼吸は行なわれず、原形質の不可逆的な凝集が起り原形質のpHが低下し、混濁膨潤を起こし、ついに液化してしまう。このように細胞の死は生活現象が止まりそのまま戻って来ないことを意味する。オパーリン<sup>(VI 1,2,14)</sup>によれば、無機化合物から有機化合物が作られ、蛋白質が形作られ、最後に物質代謝を営む蛋白質ができて生命が生れたと考えているが、彼は親水コロイドからコアセルベートと原形質との類似性を強調し、物質代謝こそ生命の特徴であるといっている。

現在、はなばなしく展開される分子生物学は生命現象を分子レベルで解明する学問であり、その主体をなすものは蛋白質と核酸である。遺伝情報はDNA分子の構造として保持されRNAなどの生体高分



子を通じて蛋白質の構造へと伝達され、最後に蛋白質の構造秩序に基づいて特異的な機能によって生命活動があらわれる。<sup>(VI 9-16, 19, 32-34)</sup>

以上は生命の現象面であるが、生物の精神作用をそのまま生物学の認識対象とすることはできない。<sup>(VI 28, 53)</sup> 精神現象も自然科学の立場からすれば因果的に認識するに止まる。<sup>(IV 82)</sup> 自然科学の立場からは、生体内に存在する特殊な力により統制されるとする生氣論 (Vitalism) は許されない。<sup>(IV 82)</sup> 自然科学においてはどこまでも機械論を徹底させ、物理化学的に説明しなければならない。生物体が物質で構成されている以上、生活物質の人工合成もいつの日にか完成されると期待されてよいかも知れない。

もう少し生命の本質を精神面から考えてみたい。精神面は哲学の領域である。科学の方法は分析と観察実験であり、哲学の方法は直観と反省とである。<sup>(IV 1, 3)</sup> 科学は生命現象を物質的空間的断面としてのみとらえられるのである。自分のうちに現象以前の内観する生命——生命の原動力を知ろうとするのは哲学の立場である。精神の三根本方向として思考、意欲、感情があり、これらは論理 (真)、倫理 (善)、美的価値 (美) の発見へと導くものである。これら普遍妥当な要求は、判断の最高原理、純真な生活をしようとする希望とあこがれ——聖なるもの (Das Heilige) ——宗教的価値——へと導かれる。<sup>(II 22, IV 82)</sup> この超感覚的世界を統一的全体と見、この統一の原理を実体的に見たとき私共はこれを哲学的に神と名づける。もし、最終統一作用を理性と名づけるならば、哲学と宗教も同じであるが、哲学は学であり、宗教は学でない。宗教に対する要求は自己に対する要求であり、自己の「いのち」に対する要求である。私共が相対的で有限であると覚知するとともに、絶対無限のものに合一して永遠の生命を得ようとする要求である。科学の方法として用いる分析は翻訳に過ぎない。このような相対的立場で満足する限り、対象を自己の支配下に置こうとする実証科学の立場が生まれ、神に対する愛でなく、人間こそ神であるというコントの *Religion de l'humanité* の立場が出て来るが、この実証科学の前進は人類を滅亡に導く危険も<sup>(I 26, IV 1)</sup> ある。科学は悪魔の学といわれるゆえんでもある。しかし、私たちが正気であるならば、私たち自身を神とは信じ得ないであろう。<sup>(II 40)</sup>

私共は両親から生まれたものであるけれども、両親すら子の生命が与えられることについては関知しない。ここに永遠の思慮と恩寵と選びとがある。真の宗教は自己の生命の革新を求めるものである。神<sup>(IV 34)</sup> について語るのでなく、神において生きるのであってこそ、生命にみちあふれた生活が生まれ、敬虔の念も湧いて来るであろう。かくされた宇宙の内面を統一する力は強大である。愛はいのちの源<sup>(IV 36)</sup> である。現世利益のために神に祈るのも、往生を目的として念仏を唱えるのも真の宗教とはいえない。<sup>(II 22, IV 25)</sup> 親鸞の歎異抄<sup>(VI 27)</sup> の「善人なおもて往生をとぐ。いわんや悪人をや」をヤスパースは<sup>(VI 24)</sup> „Wenn schon die Guten zum Leben eingehen sollen, wieviel mehr noch wird es so mit den Sünden sein!” と述べている。訳し得て妙であると思われるが、もちろんこの *Leben* は生命現象でなくて「いのち」である。愛とは二つの人格が合一することである。私共は最深の内生 (*Innerste Geburt*) により神に至ることができる。私共は神と合一することにより自己の真のいのちを見出し無限の力を感じることができる。私共の安心のために宗教を求めるのでない。<sup>(II 22)</sup> 安心立命は宗教を信ずる結果得られるものである。求めてやまない大きな「いのち」への願望は、絶対に価値ある *Sein* である。

宗教が何故必要であるかを問うのは何故生きる必要があるかと問うようなものである。ギリシャ語の

ψυχή (プシケ) というのは生まれながらの人間の生命であり、ζωή (ゾーエー) というのは神により与えられた靈的生命である。ζῶον (ゾーオン) というのは生きものであり、いのちが肉体から離れたものは, θάνατος (タナトス) <sup>(IV 74)</sup> 死である。人は信仰により靈的な生命を与えられ、汲み尽くすことのできな

い生きた泉を汲むことにより内面より革新されるのである。

社会というマクロの世界に個人個人がミクロの世界を形作る。私には社会がどのような方向に動いて行くのかまだ判断できない。けれどもマクロの見方とミクロの見方にはそれぞれ限界があるのでないだろうか。望遠鏡でウイルスを見ることはできないし、顕微鏡で月を眺めることはできない。生態学的にマクロの世界をとらえることも必要であろうし、生理学的にミクロの世界をしらべることにも必要である。マクロの世界に住むミクロの個人個人が貴重なのである。人間とは何か、人間はどのように生きるべきかは倫理の基本問題であり、大学生活においても学生たると教師たるとを問わず、この問題は倫理学としてでなく倫理として入りこんで来る。ノーベル賞受賞生化学者セント・ジェルジ博士も人間の歴史を決定するものは機械でなく倫理であると述べている。個人の倫理は実存に対する愛の決断である。

実存主義の哲学は、人間の内に何らかの虚無や深淵を認める。ハイデッガーは、人は死への存在として地上にあると考えるし、サルトルは未来に向って自己の主體的投企に本来の自己を見出そうとした。実存主義の中にはニーチェのように無神論的なものもあるし、<sup>(II 57)</sup> キェルケゴールのように有神論的なものもあろう。いずれにしても、<sup>(II 71-74)</sup> もがき苦しむ現実から開かれた境地へ脱出するのでなければ「人生丸」は沈没してしまうであろう。

人が信仰を持っていると告白することにより、<sup>(I 27, IV 31, V 7)</sup> すべて解決するとはいいい切れない。たとえば、あの十字軍の戦いを見るがよい。最近では米ソ二大陣営のしのぎの削り合いやベトナム戦争を見るがよい。力を以て力に立ち向うのは悲しいことである。むしろ、<sup>(III 6)</sup> レーニンが「キリスト教が国教の地位を得たのはキリスト教徒が民主主義の一革命的精神を持った原始キリスト教の素朴さを忘れ去ったと同様である」と述べているのは、味わうべき言葉であろう。神の愛は神の本質 (Substanz) である。神の愛 (アガペ) <sup>(IV 36)</sup>こそ私達に向って示される目的存在 (Fürsein) である。愛の力により苦しみが喜びに変わり、そこになぐさめがある。さしむかいになり、<sup>(I 27)</sup> よりすがることのできる人格を神と仰ぐのである。この世の迷いの解決 (Lösung) は救 (Erlösung) <sup>(IV 25)</sup>により初めてもたらされる。この人格に信頼し、服従することにより救いもたらされるのである。ここでいう服従はカントの<sup>(II 54, 55)</sup>ように一つの道徳的原理に対する服従でもなく、<sup>(IV 32, 43, 45-48, 51)</sup>仏教 (とくに禅宗) のように一つの救済原理に悟入することでもない。科学的真理は客体的現象を観察し、実験し証明しようとするが、信仰的真理は見ることのできない神との出会い (Begegnung) <sup>(IV 36)</sup>の体験において生ける神 (Lebendiger Got) <sup>(IV 25)</sup>としてとらえるのである。

<sup>(II 45)</sup> パッペンハイムは、人間疎外に社会、機械的技術の文明、宗教的意味の三つの側面をあげている。宗教を単に慰めや希望を与えるものと考えてはならない。人生の<sup>マ</sup>的外れ (ギリシャ語でハマルチア ἁμαρτία) <sup>(IV 33, 74)</sup>——個々の行為としては泥棒や試験のカンニングや教室内の代返もあるかも知れないが——を引き出すある一般的な原理が罪なのである。全人類はことごとく神の怒りの下に立たねばならぬ罪を持っている。最近ベストセラーになった「氷点」はこの罪の問題をよくえぐり出している。この世の中にあやまちを犯さずに生きてゆける人間はない。あやまちの大きいために死刑囚となった人の俳句作品に

も素裸になった人間の深い孤独感と心の底からの希求があり、人間の生命の尊さが脈打っている。<sup>(VI 56)</sup>愛を離れた真理は神でない。愛から迷い出るとき、人は迷い出る（パスカル：パンセ668）。最近の世界の情勢を見るにつけ、人生の福祉に奉仕するための科学は、ともすれば悪魔の学となる可能性を持っている。ノーベル物理学賞受賞者ボルン博士<sup>(V 4)</sup>も核爆発が悪用されることを憂い、「私共の自己保存のきわめて素朴な要求に対しても叡智が欠けているのか、愛の能力がないのか、目がくらんでいるのか」と述べている。同じくノーベル賞受賞者スタンレー博士と湯川博士との対談<sup>(VI 12)</sup>においても、ワイゼッカー博士とバルト博士との対談<sup>(IV 17)</sup>においても、セントジェルジ博士<sup>(V 15)</sup>も湯川博士<sup>(V 15)</sup>らも皆同様に、原爆の脅威、技術の誤用が人類の破滅を招こうとしている現状を憂い人間のあり方に照して科学の真の意義を問うている。現在こそ人間の生き方を深く真剣に考えなければならない時期に違いない。

#### IV お わ り に

アナトール・フランスの *La vie en fleur*（花咲ける人生）から一節を引いて結びとしたい。„Je remarquais que dans le monde, beaucoup de jeune gens qui ne me valaient pas plaisaient et réussaient mieux que moi. J'ai cru que la seule chose raisonnable est de chercher le plaisir.” 何となく、宮沢賢治の「雨ニモ負ケズ風ニモ負ケズ」という詩を思い出させるようである。小さな実験室の片隅でささやかな真理追究の努力を続けたいものである。人から愛されたいなど厚かましいことを考えるのでなく、すべての人を心から愛することができればどんなにか心豊かに楽しいことであろうか。清水幾太郎氏は「古典の読みかた(岩波文庫)」の中で「日本の哲学者は現代の科学の問題についても人間の苦悩についてもほとんど知らず考えない。ただ西洋哲学の古典に通じているだけである」と述べている。哲学者こそ現代の苦悩に立ち向って考え抜くことができる人であろうと思うのだが……。私が今まで述べて来たことは、しろうとのまと外れの片よった論議であろう。しかし大学の片隅にいるものとして、ここで起こるいろいろの問題について学生も教師も関心を持つ姿勢は取りたいものだと思う。

最近の朝日新聞（1966.11.1）に祖国を愛しない在米邦人留学生という投書があった。若い日本人特に留学生が日本に帰りがらないというのである。私は10年前アメリカから日本に帰ったときも、今回ヨーロッパから帰国したときも、日本はコントンとしたカオスの状態にあるけれども、ものすごくエネルギーの満ち溢れた美しい国だと思った。私はこの祖国日本をこよなく愛する。このコントンとした日本を、軍国主義の日本としてでなく文化的にオリエンテートされた日本に作り上げて行くのは、それこそエネルギーがみち溢れ、研ぎすまされた知性を持った学生に課せられた大きな使命といわねばならない。学生と共に喜び、学生と共に泣き、同じ人生の旅人として教師も学生と共に歩みつづけたいものである。

1966.11.23

勤労感謝の日に

## V 参 考 文 献

小稿をまとめるに当たり、参考とした主なものを掲げた。やや雑然としているけれども学生がこんな問題を考える場合に役に立てば、しあわせである。外国の原著はほとんど読んでいないので申訳ない。

## I 大学・学問・真理・学生・人間像

1. 石原謙：大学の歴史 岩波講座 哲学 2. Newman, C. J. H.: On the scope and nature of university education. Dens & Sons. 1943 3. 矢内原忠雄：大学について 東大出版会 4. 松川成夫：近代の大学の性格とその批判(大学と人間)日本YMCA出版部 5. 蟬山政道：大学及び大学生論 中央公論社 6. 大久保利謙：日本の大学 創元社 7. ヤスパース：大学の理念 理想社 8. 渡辺義晴：大学の探究 三一書房 9. 麻生磯次：新しい大学生活 至文堂 10. 中央公論社：世界の大学、その伝統と生活中 中央公論社 11. Conant, J. B.: Education and Liberty. The role of the school in a modern democracy. New American Library. 1953 12. 高坂正顕：大学の理念：系譜と問題 創文社 13. 斎藤勇：学園随想 わかき人々のために 研究社 14. 上原専禄：歴史意識に立つ教育 国土社 15. 朝日新聞社：大学の自治 朝日新聞社 16. 家永三郎：大学の自由の歴史 塙書房 17. 南原繁：大学の自由 東大出版部 18. ロジャース：大学教育の理念 緑地社 19. 朝日新聞社：あすへの教育・大学篇 朝日新聞社 20. 唐沢富太郎：学生の歴史 創文社 21. 清水幾太郎：学生論 河出書房 22. 新井恒男：機危の学生運動、歴史とその展望 明治書院 23. 玉虫文一：科学と一般教育 岩波書店 24. ビュアリ(森島訳)：思想の自由の歴史 岩波新書 25. 安田武：現代学生論 世界 12月号 1965 26. 沢瀉久敬：真理への意志 角川新書 27. 高橋三郎：真理の継承 待晨堂 28. 蟬山政道：学生思想問題 岩波書店 29. 末川博：教育学問の自由 青木書店 30. 河合栄治郎：学生思想問題 岩波書店 31. 南原繁：真理の闘い 東大出版部 32. 本橋・藤井・玉井：学生運動 世界歴史事典 平凡社 33. 住谷・高桑・小倉：日本学生社会運動史 同志社大出版部 34. 全学連事務局：学生運動 真理社 35. 阿部行蔵編：全学連・怒れる若者 緑風社 36. 津田道夫：現代のトロッキズム 青木書店 37. 警備警察研究会：日本の学生運動(その理論と歴史) 新興出版社 38. 松田勇：課外活動・自治活動(学生助育総論) 文部省学術局学生課 39. 西田亀久夫：厚生補導の諸問題(学生助育総論) 文部省学術局学生課 40. 山岡喜久夫：学生自治活動をめぐる状況について 大学キリスト者 23.24.1966 41. 木島藤太郎：大学教師の反省 朝日新聞 1964 42. 森田宗一：若き人間像をたずねて ターゲンク講演シリーズ 63 43. 無名氏：期待される人間像に見られる反科学性 科学 36(11) 巻頭言 1966 44. 文部省大臣官房広報主任室：学生の課外活動と大学の教育指導のあり方について 昭和40年 45. 岡田勝子：望まれる教師像 大学キリスト者 22 1960 46. 国立大学協会：学生問題に関する所見案 日本教育新聞 3098号 41.10.22 47. 古谷圭一：世俗化の時代における大学教師の現状 大学キリスト者 26.27 1966 48. 生島毅一郎：現代教師論 大学キリスト者 22 1965 49. ジョンソン：人類に奉仕する学問 アメリカ政策シリーズ 647 50. 国立大学協会：大学の管理運営に関する意見および中間報告, 教育学術新聞 514号 S41.8.24 51. 坂東慧：青年論 三一書房 52. 田中耕太郎・末川博・我妻榮・大内兵衛・宮沢俊義：大学の自治 朝日新聞社 53. 河合栄治郎：学生に与う 現代教養文庫 54. 岡本清一：自由の問題 岩波新書 55. 高桑純夫：人間の自由について 岩波新書 56. 学生生活編集部：戦後学生運動史 三一新書 57. 南原繁・茅誠司・大河内一男：大学のありかた 学士会会報 6692 1966

## II 教育・倫理・哲学

1. 田浦武雄：教育入門—新しい知性の創造 誠信書房 2. 宗像誠之：私の教育宣言 新波新書 3. 伊藤昇編：教育はこれでいいのか 有紀書房 4. 矢川徳光：国民教育学 明治図書 5. 森戸辰男：日本教育の回顧と展

望 大日本印刷 6. 石山脩平：現代教育論 朝倉書店 7. 森昭：ドイツ教育の示唆するもの 黎明書房 8. 長田新：教育学 岩波書店 9. 上原専緑：歴史意識に立つ教育 国士社 10. 城戸・石山ら：世界の教育 5 高等教育 共立出版 11. 稲富栄次郎：現代教育の哲学 明治図書 12. 五十嵐颯：民主教育論 青木書店 13. 矢川徳光編：国民と教育 青木書店 14. 矢川徳光：日本教育の危機 新評論社 15. 木村素衛：形成的自覚 弘文堂 16. 和辻哲郎：人間の学としての倫理学 岩波全書 17. 豊田全：教養倫理学 弘文堂 18. 小収治：倫理学—生活と倫理 高文社 19. 天野貞祐：今日に生きる倫理 西山書店 20. 阿部次郎：倫理学の根本問題 角川文庫 21. 南原繁：人間革命 東大出版会 22. 西田幾太郎：善の研究 岩波文庫 23. 阿部次郎：三太郎の日記 角川書店 24. 三木清：哲学ノート 正統 河出書房 25. ヤスパース(草雑訳)：理性と実存 新潮文庫 26. ヤスパース(草雑訳)：哲学入門 岩波文庫 27. 田辺元：哲学入門 筑摩書房 28. 田辺元：哲学通論 岩波全書 29. 和辻哲郎：ニイチェ研究 和辻哲郎全集 第1集 30. 波多野完治編：人間と思想 有斐閣 31. 和辻哲郎：キェルケゴール 和辻哲郎全集 32. 依田新：青年心理 培風館 33. 望月衛：青年心理学 光文社 34. 南博：初歩心理学 カッパ文庫 35. 豊田全：和辻博士はマルクスの人間学をどのように捉えたか 島根農大研報 12 B1 1963 36. 豊田全：人格と人物とに関する一考察 島根農大研報 6 B 1958 37. ルソー(平林訳)：エミール岩波文庫 38. 西晋一郎：東洋道徳の研究 岩波書店 39. 波多野精一：宗教哲学 岩波全書 40. 田中美和太郎：哲学初歩 岩波全書 41. 丸山真男：日本の思想 岩波新書 42. グットナイフ(後藤訳)：発達心理学 金子書房 43. 村上仁：異常心理学 岩波全書 44. 西谷・高坂・椎名・猪木・隅谷・亀井ら：戦後日本精神史 創文社 45. パッペンハイム：近代人の疎外 岩波新書 46. 武市健人ら：第二学生への手紙・人文科学を学ぶものへ 同文館 47. 西田幾太郎：哲学概論 岩波書店 48. オッペンハイマー(西村訳)：わが精神の冒険 荒地出版 49. シュバイツァー(西村訳)：現代に生きる信条 荒地出版 50. 三木清：哲学入門 岩波新書 51. 久野収・鷺見俊輔：現代日本の思想 岩波新書 52. 久野収・鷺見俊輔：戦後日本の思想 中央公論社 53. 高坂正顕：西田哲学と田辺哲学 黎明書房 54. カント(天野訳)：純粋理性批判 岩波文庫 55. カント(波多野訳)：実践理性批判 岩波文庫 56. ヒルティ(草間訳)：眠られぬ夜の為に 岩波文庫 57. ハイデッガー(大江訳)：形而上学とは何か 理想社 58. 高山岩男：実存哲学の話 宝文館 59. 倉田百三：愛と認識との出発 角川文庫 60. 柳田謙十郎：プロレタリアの倫理 文理書院 61. 森広一：哲学入門 合同出版 62. 塩尻公明：人生論 六月社 63. 斉藤信治：哲学初歩 創元社 64. 出隆：哲学以前 岩波書店 65. 大島康正：これからの倫理 学生教養新書 66. 天野格之助：倫理学要説 福村書店 67. 田中熙：倫理学ノート S34年度 68. 金築忠雄：教育学におけるさまざまな学的態度について 島根農大研報 6 B S33 69. アレクサンドロフら：モスクワ大学 70. 土田薫：知られざる教育論 黎明書房 71. サルトル(平井訳)：方法の問題 人文書院 72. サルトル(松浪訳)：存在と無 人文書院 73. サルトル(竹内・矢内原訳)：弁証法的理性批判Ⅰ 人文書院 74. サルトル(平井・森本訳)：弁証法的理性批判Ⅱ 人文書院 75. ヘーゲル(武市訳)：哲学入門 岩波文庫 76. 松村一人：ヘーゲル アテネ文庫 77. ニーチェ(竹内訳)：ツアラトストラかく語りき 新潮文庫 78. レスターミス(周郷訳)：教育入門 岩波新書 79. プラトン：饗宴 岩波文庫 80. ショウペンハウエル(石井訳)：随想 世界大思想全集 哲学13 河出書房 81. キェルケゴール(松浪訳)：死にいたる病 世界大思想全集 哲学 13 河出書房 82. 南博：体系社会心理学 光文社 83. モーリス・ドベス(吉倉訳)：青年期白水仙 84. クレッチマー(西丸ら訳)：医学的心理学 みすず書房 85. クレッチマー(吉益訳)：ヒステリーの心理 みすず書房 86. 国分一太郎：教師 その仕事 岩波新書 87. ヘーゲル(岡田・速水訳)：法の哲学 岩波書店 88. 篠原助市：哲学綱要 宝文館

### Ⅲ 社会思想・歴史

1. マルクス (向坂訳): 資本論 岩波文庫
2. マルクス (山村訳): 哲学の貧困 岩波文庫
3. マルクス・エンゲルス: 聖家族 岩波文庫
4. レーニン (宇高訳): 帝国主義論 岩波文庫
5. マルクス・エンゲルス: 共産党宣言 マル・エン選集Ⅱの下
6. レーニン (宇高訳): 国家と革命 岩波文庫
7. レーニン: 青年同盟の任務 青木文庫
8. エンゲルス (田辺訳): 自然の弁証法 岩波文庫
9. エンゲルス: イギリスにおける労働者階級の状態 マル・エン選集補
10. マルクス: ゴータ綱要批判 マル・エン選集
11. エンゲルス (栗田訳): 反デューリング論 岩波文庫
12. スターリン: 弁証法的及び史的唯物論 国民文庫
13. フォイエルバッハ: キリスト教の本質 (上下) 岩波文庫
14. エンゲルス (佐野訳): フォイエルバッハ論 岩波文庫
15. エンゲルス (大内訳): 空想より科学へ 岩波文庫
16. 毛沢東 (松村竹内訳): 実践論・矛盾論 岩波文庫
17. スウィージー (中村訳): 資本主義発展の理論 日本評論社
18. レーニン: 何をなすべきか 国民文庫
19. レーニン: 哲学ノート 岩波文庫
20. レーニン (堀江訳): 帝国主義論 国民文庫
21. スターリン: レーニン主義の基礎 国民文庫
22. スターリン (石堂訳): 弁証法的唯物論と史的唯物論 国民文庫
23. マルクス・エンゲルス (伊東・山崎訳): ドイツイデオロギー 岩波文庫
24. クリストファー・ヒル (岡訳): レーニンとロシア革命 岩波新書
25. ヘーゲル (真下訳): 弁証法入門 三笠書房
26. 松村一人: 弁証法とはどういうものか 岩波新書
27. 高山岩男: 弁証法入門 アテネ文庫
28. 柳田謙十郎: 弁証法入門 青春出版社
29. 三浦つとむ: 弁証法とはどういう科学か 講談社
30. シューマン: ソビエトの政治——内政と外交 岩波現代叢書
31. 河上肇: マルクス主義経済学の基礎理論 改造社
32. 羽仁五郎: 日本人民の歴史 社会思想研究会 出版部
33. トインビー (蟻山・阿部訳): 歴史の研究 正統 社会思想研究会
34. 井汲卓一ら: 現代マルクス主義反省と展望 大月書店
35. 田辺振太郎: 唯物論的弁証法の研究 三一書房
36. 大河内一男: 続社会思想史 有斐閣
37. 日高六郎・北川隆吉: 現代社会集団論 東大出版会
38. 長田新: 社会主義の文化と教育 理論社
39. ピクウ (北沢訳): 社会主義対資本主義 東洋経済新報社
40. 大内兵衛: 社会主義とはどういう現実か 岩波書店
41. 河井栄次郎: マルクシズムとは 現代教養文庫
42. 平井新: 社会主義と共産主義 現代教養文庫
43. 杉浦明: 細胞生活——共産党員の悲しみと喜び 光文社
44. 塩尻公明: 人格主義と社会主義
45. ラスキ: 共産主義論 現代教養文庫
46. 竹内・山口・斎藤・野原: 中国革命思想
47. 赤松克磨: 日本社会運動史
48. ラッセル: ソビエト共産主義——ボルシェビズムの実践と理論
49. 高島素之: マルクス経済学 日本評論社
50. 薛暮橋: 物の考え方・学び方 駁台社
51. 守屋典郎: 日本資本主義発展史 青木新書
52. 市川正一: 日本共産党闘争小史 国民文庫
53. 小泉信三: 共産主義批判の常識 新潮社
54. 河上肇: マルクス主義経済学の基礎理論 改造社
55. 河上栄治郎: 社会政策原理 社会政策研究会
56. 福武直: 社会学入門 学生社
57. 南博: 体系社会学 光文社
58. 黒川純一: 社会学要講 時潮社
59. 豊田四郎: 社会科学入門 合同出版社
60. アシュベイ: フルシチョフじかに見たアメリカ カッパ文庫
61. 貝塚茂樹: 毛沢東伝 岩波新書
62. 青山秀夫: マックスウェーバー 岩波新書
63. カー (清水訳): 歴史とは何か 岩波新書
64. ゴールドンチャイルド (ねず訳): 歴史学入門 新評論社
65. 南原繁: 人間と政治 岩波新書
66. レオ・ヒューバーマン: 社会主義入門 岩波新書
67. 岩波講座 現代1: 現代の問題点 岩波書店
68. 日高六郎編: 人間と社会 有斐閣
69. 清水幾太郎: 人間と歴史 有斐閣
70. 丸山真男: 人間と政治 有斐閣
71. 木村亀二ら: 第二学生への手紙・社会科学を学ぶものへ 同文館
72. 和歌森太郎: 歴史の見かた 現代教養文庫
73. 高島善哉: 社会科学と人間革命 勁草書房
74. ラスキ (岡田訳): 危機に立つ民主主義 ミネルヴァ書房
75. 中野哲郎: 現代における思想と行動 三一書房
76. 向坂逸郎: マルクス経済学の方法 岩波書店
77. 向坂逸郎: マルクスをめぐりて 日本評論社
78. 遊部久蔵: 資本論研究 ミネルヴァ書房
79. 長谷部・横山編: 資本論研究入門 青木書店
80. 鶴田三千夫: 社会主義社会の矛盾 現代マルクス主義Ⅲ 大月書店
81. 長州一二: マルクス主義理論と現代 現代マルク

ス主義Ⅰ 大月書店 82. 清水幾太郎：現代思想入門 岩波書店 83. 寺沢恒信：サルトルとカミュ——自由と革命 弘文堂 84. 近代経済学研究会編：マルクス経済学 富士書店 85. 村田勉郎：幸福への技術 三一新書 86. 山崎謙二：新しい考え方 三一新書 87. プレハノフ(牟田・有野訳)：歴史における個人の役割 未来社 88. スウィージー(都留訳)：歴史としての現代——資本主義・社会主義に関する論攻 岩波現代叢書 89. カー(清水訳)：歴史とは何か 岩波新書 90. ベルンハイム(小野訳)：歴史とは何ぞや 岩波書店 91. アントニー(讚井訳)：歴史主義から社会学へ 未来社 92. 原佑：現代のゆくえ 筑摩書房 93. 岸本昌雄：歴史哲学 理想社 94. 高坂正顕：歴史的世界 福村書店 95. マントン(皆藤訳)：今日のソ連 岩波新書 96. 赤岩栄：共産主義と宗教の問題点現代キリスト教講座5 修道社 97. 武藤光朗・猪木正道・気賀健三・尾上正男：ソビエト連邦 日本国連協会京都本部 98. 貝島兼三郎：カトリシズム 岩波新書 99. 山川均：日本の再軍備 岩波新書 100. 南原繁：人間と政治 岩波新書 101. マントン(皆藤訳)：今日のソ連 岩波新書 102. 西田直二郎：日本文化史序説 改造社 103. 遠山茂樹・今井清一・藤原彰：昭和史 岩波新書 104. 門脇徳二・黒田俊二：テキスト日本史 三一書房 105. 黒川純一：社会学要講 時潮社

#### IV 科学と宗教

1. 沢瀉久敬：科学入門 角川新書 2. 吉田富三：科学の限界 ターグンク講演シリーズ №2 3. 沢瀉久敬：医学概論Ⅰ 科学について 創元社 4. 青木茂：科学と人間と信仰 日本YMCA出版部 5. 弥永昌吉ら：第二学生への手紙 自然科学を学ぶものへ 同文館 6. ワイゼッカー(鳴海訳)：信仰と自然科学との対話 新教出版社 7. ゴルドマン(清水・川俣訳)：人間の科学と哲学 岩波新書 8. 早坂一郎：科学における主体性の問題 アカデミーターグンク報告 1962 9. 中谷宇吉郎：科学の考え方 岩波新書 10. クラウザー(松井訳)：科学は未来を開く 岩波現代叢書 11. ハイトラー(岡・三木訳)：科学と人間 みすず書房 12. スタンレー・湯川秀樹：科学のために 朝日新聞 S41.11.13, 16—17 13. 坂田昌一編：人間と自然 有斐閣 14. ウイナー：科学と神 みすず書房 15. 池田大作：科学と宗教 聖教出版社 16. 務合理作：科学・倫理・宗教 培風館 17. セントジェルジ(小川訳)：科学・倫理・政治—動乱に生きた—科学者の省察 岩波書店 18. 西川哲治：自然科学とキリスト教現代キリスト教講座 第5巻 修道社 19. 波多野精一：宗教哲学 岩波全書 20. 矢内原忠雄：キリスト教入門 角川新書 21. 塩尻公明：宗教と人生 社会思想研究会 22. 小塩力：聖書入門 岩波新書 23. ケルケゴール：死に至る病 岩波世界大思想全集 24. ケルケゴール：神への思い 新教出版社 25. プルンナー(豊沢訳)：我等の信仰 新教出版社 26. パルト(井上訳)：教義学要綱 新教出版社 27. シュバイツァー(竹内訳)：わが生活と思想より 白水社 28. 関根正雄：イスラエル宗教文化史 岩波全書 29. アウグスティヌス：告白 岩波文庫 30. パスカル(由木訳)：冥想録 白水社 31. 高橋三郎：ルターの根本思想とその限界 山本書店 32. 高橋三郎：ロマ書講義Ⅰ—Ⅲ 山本書店 33. 矢内原忠雄：ロマ書 角川書店 34. ルター：祈りと慰めの言葉 35. 前田護郎：新約聖書概説 岩波全書 36. プルンナー(熊沢・大木訳)：永遠 新教出版社 37. カルヴァン(渡辺訳)：信仰の手引き 新教出版社 38. 内村鑑三：余は如何にして基督教徒となりしか 岩波文庫 39. 石原謙：新約聖書 岩波書店 40. 浅野順一：旧約聖書 岩波書店 41. ラスキ・アインシュタイン・ウエルズ：私は信ずる 教養文庫 42. 賀川豊彦：聖書の話 現代教養文庫 43. 鈴木大拙：仏教の大意 法蔵館 44. 友松円諦：法句経講義 角川文庫 45. 鈴木大法：禅とは何か 春秋社 46. 鈴木大拙：禅と日本文化 岩波新書 47. 増谷文雄：現代仏教入門 角川文庫 48. 渡辺照広：仏教 岩波新書 49. 倉田百三：親鸞 角川書店 50. 高神覚昇：般若心経講義 51. Humphrey, C.: Buddhism. Penguin Books 1951 52. 亀井勝一郎：親鸞 角川新書 53. 増谷文雄：親鸞・道元・日蓮 日本歴史新書 至文堂 54. 津田左右吉：日本の神道 角川文庫 55. 田中能義：神道概論 明治書院 56. 柳田国男：

日本の祭 角川文庫 57. 竹田克州・高取正男：日本人の信仰 58. 蒲生礼一：イスラム 岩波新書 59. 笠原一男：転換期の宗教 NHKブックス 60. シュバイツェル(鈴木訳)：キリスト教と世界宗教 岩波文庫 61. 鈴木大拙編：宗教 毎日新聞社 62. 佐藤賢順：宗教の論理と表現 理想社 63. 高山岩男：現代・不安と宗教 創文社 64. 三枝博音編：宗教と科学の歴史 新評論社 65. 田中美知太郎：宗教と倫理 講座 哲学大系7 人文書院 66. 中村元：宗教と社会倫理 岩波書店 67. トーニー(出口・越智訳)：宗教と資本主義の興隆 岩波書店 68. 西谷啓治：宗教とは何か 創文社 69. 岸本英夫：宗教学 大明堂 70. シュライエルマッヘル(佐野訳)：宗教論 岩波書店 71. シュナイデルクルト(梶田訳)：宗教精神病理学入門 みすず書房 72. 小口修一：宗教社会学 東大出版社 73. 熊野・三善：聖書概観 ヨルダン社 74. 神田盾夫：新約聖書ギリシャ語入門 岩波全書 75. スコット(小黑訳)：主の祈り YMC A 76. 北森嘉蔵：パウロ書簡講話 河出書房 77. 赤岩栄：神を探ねて アテネ文庫 78. 半田文夫：原始キリスト教史 アテネ新書 79. 波多野精一：原始キリスト教 岩波全書 80. 大野三郎：日本の科学と科学者 現代教養文庫 81. ホワイト(森島訳)：科学と宗教との闘争 岩波新書 82. 田辺元：科学概論 岩波書店 83. 林纈：科学概論 中山書店 84. 河合栄治郎編：学生と科学 日本評論社 85. サマヴィル(市井訳)：科学とは何か 白揚社 86. 石原謙：基督教史 岩波全書 87. 政池仁：内村鑑三伝 三一書房 88. 菅円吉：福音書講話 河出書房 89. パルト(井上訳)：我山に向けて目をあぐ 新教出版社 90. キェルケゴール(倉松訳)：神への思い 新教出版社 91. 八木重吉：貧しき信徒 新教新書 92. 関根文之助：聖書の読み方 角川文庫 93. オスカー・クルマン(前田訳)：キリストと時 岩波現代叢書 94. ダンテ：神曲 新潮社 95. カルヴィン：キリスト教綱要 新教出版社 96. パルト(吉村訳)：ロマ書 角川書店 97. 矢内原忠雄：創世記 角川書店 98. 矢内原忠雄：詩編 角川書店 99. 小口偉一ら：宗教と信仰の心理学 河出書房 100. 上田正昭：神話の世界 創元社 101. ラジオテキスト東本願寺：観無量寿経 真宗大谷派宗務所 S37 102. 友松円諦：般若心経講話 河出書房 103. 久保田正文：法華経講話 河出書房 104. 高木宏夫：日本の新興宗教 岩波新書 105. 幸田成友校訂：古事記 岩波文庫 106. 黒板勝美編：日本書紀 岩波文庫 107. Chamberlain, B. H.: Records of Ancient Matters (Kojiki). J. L. Thompson & Co. Kobe 1932 108. Haguenaer, M. C.: L'adresse du dignitaire de la Province d'Izumo. Bull. Maison Franco-Japonaise 1(4):1-47, 1929 109. 倉田百三：出家とその弟子 大東出版社 110. 倉田百三：法然と親鸞の信仰 大東出版社 111. ブルトマン(山岡・小黑訳)：キリストと神話 新教出版社

## V 平 和

1. サマーヴィル(久野訳)：平和の哲学 岩波 現代叢書 2. 南原繁：平和の宣言 東大出版会 3. リード：平和のための教育 岩波現代叢書 4. Born, M.: *Entwicklung und Wesen des Atomalters*. Merkur 90, 1955 5. カンデル(箕輪訳)：ヒューマニズムと国際的理解 岩波現代叢書 6. シュミット：めぐりあう二つの世界 待晨新書 7. ミューラー(酒枝訳)：福音・平和・国防 待晨新書 8. ライシャワー：平和への航海 日米の対話を深めるために 中央公論 1966 2月号 9. 山本昌木：ひとりごと 地軸 創刊号 10. 片山哲：民主主義の源をさぐる 日本クリスチャンアカデミー出版部 11. 青年学級テキスト：人類の文化 大蔵省印刷局 12. 竹内俊吉：安保条約の改正 アルプスシリーズ 第94輯 13. 安部能成：一リベラリストのことば 頸草書房 14. 竹村英輔：総評ベルリン特派員 弘文堂 15. 湯川秀樹・朝永振一郎・坂田昌一：平和時代を創造するために—科学者は訴える 岩波新書 16. 谷川徹三：東と西との間の日本 岩波新書 17. 岩波講座 現代 6 冷戦 岩波書店 18. 木内信胤：世界の見かた 論争社 19. 朝日新聞社：中ソ論争 朝日新聞社 20. 研究者懇談会：新安保条約 三一書房 21. 岡倉古志郎：国際情勢の見方 三一書房 22. 斎藤真：アメリカ外交の理論と現実 東大出版部 23. 前芝



確三：国際政治学大綱 法律文化社 24. ケネディ（波多野訳）：自由の旗の下に 日本外政学会 25. ラスキ（大内訳）：岐路に立つ現代 法政大出版部 26. アリストパネス（高津訳）：平和 岩波書店 27. 東洋経済新報社：平和への道 8巻 世界講座 28. フルシチョフ：平和に仲よくくらそう（フルシチョフ訪米演説集） ソ連大使館 29. 安倍能成：平和への念願 岩波書店 30. マイヤー（木下訳）：平和か無政府状態か 岩波現代叢書 31. 米国大使館出版部：平和の指導者たち——ノーベル平和賞を受賞したアメリカ人 米国大使館 32. 杉捷夫：平和の証言 岩波書店 33. ケネディー（細野・小谷訳）：平和のための戦略 日本外政学会 34. エラスムス（箕輪訳）：平和の訴え 岩波文庫 35. オーヴァストリート（白神訳）：平和という名の戦争 荒地出版社 36. 小泉信三：平和論 文芸春秋社 37. ロスシュタイン（内山訳）：平和的共存 岩波書店 38. 上杉重二郎：ベルリン東と西 三一書房 39. 内村鑑三：非戦論 角川文庫 40. 井上良雄：キリスト教会と平和問題 現代キリスト教講座 5 修道社 41. 坂田昌一：科学と平和の創造 岩波書店 42. シバラム（小谷訳）：ベトナム戦争への疑問 荒地出版社 43. コリヤー（佐藤訳）：ベルリンと東欧の将来 時事通信社 44. Chalfont, L.: The british approach to disarmament. Bulletin 46.16: 49—78, 1965 45. Johnson, L.B.: A new Asia coming its own. U.S. Policy Series. 1966

## VI 生命・いのち・生きること

1. オパーリン（江上訳）：生命の起源と生化学 岩波新書 2. オパーリン（東大ソ医研訳）：生命の起源 新崎新書 3. 沢瀉久敬：医学概論 第二部 生命について 創元社 4. ウォディントン（白上・碓井訳）：生命の本質 岩波書店 5. パナール：生命の起源 岩波書店 6. ベルランフィ：生命—生体論の考察 みすず書房 7. イウオフ：ウイルス・細胞・生物間の相互作用 科学 36(11): 599—604, 1966 8. 杉田・田川・石田ら：生化学からみた生命 現代生物学講座3 共立出版 9. ウォルター：生命の神秘 白揚社 10. ビードル：生命の物理と化学 白揚社 11. シュレディンガー：生命とは何か 岩波新書 12. スタンレー・ヴィレンス：ウイルス—生命の本質について 岩波新書 13. 川喜用愛郎：生物と無生物との間 岩波新書 14. オパーリン：生命—その本質・起源・発展 15. シュール・カルル：生命の起源と生化学 岩波新書 16. 木村資生：進化と生命の起源 現代生物学講座共立出版社 17. 早坂一郎：生物の進化 岩波書店 18. 早坂一郎：古生物学と進化 ダーウィン進化論百年記念論集 19. 和田昭允・郷信広：生命は分子進化の所産か？ 科学 36(11): 605—611, 1966 20. 渡辺照宏：死後の世界 岩波新書 21. 毎日新聞社：いかに生きるか 毎日宗教講座 3 22. 豊田全：生 (Leben) と精神 (Geist) に関する一考察 島根農大研報 7B 1959 23. 植村正久：永生 新教出版社 24. Jaspers, K.: Vom Ursprung und Ziel der Geschichte. Artemis-Verlag Zürich 1949. 25. DuNouy, L.: Human destiny. New American Library 1956. 26. Borek, E.: The atoms within us. Berkeley Publ. Corp. 1960. 27. 親鸞：歎異抄 岩波文庫 28. ヤスパース：精神病理学総論（上中下） 岩波書店 29. 島崎敏樹：精神病理学と現代 NHK教養大学 S36 30. バトラー（飯島訳）：人間—この微小なる宇宙 みすず書房 31. ホールデン（八杉訳）：人間とはなにか 岩波書店 32. 沼田真ら：生命の探究 中教出版 33. 八杉竜一：生命 毎日新聞社 34. 伏見・林ら：生命の科学 中山書店 35. 正宗白鳥：人生の幸福 文理書院 36. 寺島文夫：人生の教養と創造 精神革命 文理書院 37. トルストイ（原訳）：人生の道 岩波書店 38. 寺島文夫：人生の理想と現実 人生論 文理書院 39. 安倍能成：人生をどう生きるか 講談社 40. 御木徳近：人生は芸術である 東西五月社 41. 天野貞祐：人生論 河出書房 42. ヒューム（大槻訳）：人生論 岩波書店 43. 柳田謙一郎：人生哲学 人生の正しい見方・生き方 文理書院 44. エピクテートス（鹿野訳）：人生談義 岩波書店 45. 内村鑑三：一日一生 角川文庫 46. 久保勉訳編：ケーベル博士随筆集 岩波文庫 47. 増谷文雄ら：人間の幸福と自由 毎日新聞社 48. 武者小路実篤：人生論 岩波新書 49. スタンレー（梅田訳）：ウイルス—生命の本質について 岩波書店 50. シュレディンガー（岡・鎮

目訳) : 生命とは何か 岩波新書 51. 尾崎秀実 : 愛情はふる星のごとく 世界評論社 52. 毎日宗教講座 : われらはいかなる人間であるか 毎日新聞社 53. 橋田邦彦 : 生理学 上下 岩波全書 54. 善波周 : 弾巢 一生堂書店 55. 日本戦没学生手記編集委員会 : きけわだつみのこえ 東京大学出版会 56. 北山河・北さとり編 : 処刑前夜 カッパブックス.

追記 : 本稿校正中にオープンハイマー博士 (1967・2・18) と松村清二博士 (1967・2・19) の死を知った。前者は、アメリカ原爆製造の最高指導者であったがのちに水爆製造に批判的立場を取り裁判にかけられた。後者は、放射線生物学の先駆者であり慢性骨髄性白血病による死は研究のための犠牲といえるかも知れない。共に本稿Ⅲの問題と関連して現代に生きる科学者のむずかしさを痛感させられる。